

キャンパスへの旅

ママは大学生

木元教子

キャンパスへの旅

ママは大学生
木元教子

キャンパスへの旅 ママは大学生

定価九八〇円

昭和五十七年五月二十五日 初版印刷

昭和五十七年六月二十五日 初版発行

著者 木元教子

発行者 稲村與志雄

印刷所 稲村印刷株式会社

発行所

株式会社都市と生活社

〒112 東京都文京区小石川二―八―九

電話〇三―八―四―五八―一七（代表）

振替・東京四―八八九七五

©Noriko Kimoto 1982 Printed in Japan 複印禁止 0095-0005-5407

落丁・乱丁本は本社にてお取り替えます。

キャンパスへの旅 目次

1章

ローヒールにはきかえて

17

受験勉強 18

合格通知 20

ママは大学生なんだね 25

入学式はサーモンピンクのスーツで 28

翔んでるオンナ? 31

ニックネーム 34

夕餉の煙 39

ローヒールにはきかえて 42

2章

わたしのもう一つの人生

45

六月の雨 46

体育実技 48

われら“花組”七人衆 52

3章

な・つ・や・す・み

海辺からの暑中見舞 70

マチブミキタラズ 73

井戸端会議 76

宿題地獄 79

いい旅、いい若いモン 82

家出 86

内蒙古だより 89

続・内蒙古だより 92

中国語で「今天 很 热」 55

期末試験 58

苦あれば楽あり 62

前期終了 65

4章 新・共働き事情

キャンパスの背広族 96

ぎんなんと茶わん蒸し 99

十月病 102

結婚観と仕事観 105

新・共働き事情 110

わたしは働き中毒? 115

続・家出 118

鈴懸 すいかけ 122

空き缶の募金箱 125

ひとこと言わせてもらえば 129

メリー・クリスマス 132

学割は年に関係なし 135

5章

一年の時は流れ

主婦の座

140

正月の合宿ゼミ

143

コビー屋さん大繁盛

146

背中

149

時計よ止まれ

153

自分再発見

156

学生食堂でマルクス談議

159

サインはV

163

雛まつり

166

家出・その後

169

“生”の持ち時間

172

一年の時は流れ
176

私のレポート集 1 年次生時提出分より

△レポートⅠ▽私にとっての坂口安吾・愚妻論と墮落論 180

△レポートⅡ▽私にとっての被爆者援護のあり方・M氏との対話より 185

△レポートⅢ▽「ソクラテスの弁明」より・ソクラテスそしてクサンティッペ 202

エビローグ——そして四年めの春に 213

装幀・挿画 北見 隆

キャンパスへの旅——ママは大学生

ブ ロ ー グ

大学再入学まで

わたし自身のための新たな出発

その日の朝、わたしは牛乳をちょっと足して小鍋のスープを温めました。夫も息子達も出かけてしまい、テレビが力んでニュースを伝えていきます。夫が手をつけなかったトーストと、息子が食べ残した目玉焼きと、これだけがホカホカのスープでわたしは残飯整理ふりの朝食をとりはじめました。食卓の上に拡げた新聞は、昭和五十三年七月四日の朝刊。

まずサラリと一面に目を通し、次は後ろから社会面をじっくりと。スポーツの頁はとばして、家庭欄、経済、国際面は気になる所や興味ある所を拾い読み、そして教育、総合欄を開いた時、わたしの眼はある一点で動かなくなりました。そこにはこんな見出しがあったのです。

「学習意欲や人柄重視、立教大学法学部で日本で初めての社会人入試」

朝食どころではありません。わたしは椅子から立ち上がり、新聞の上におおいかぶさって文字を追いました。この時から、わたしの大学受験戦争は始まったのです。

昭和三十一年、わたしは立教大学文学部からTBSにアナウンサーとして入社、翌年社内結婚をいたしました。以来二十数年間、二度の出産で休職期間はあったものの、フリーの立場をとり、放送を中心としたマスコミの分野で仕事を続けています。この世界ではもう古手の方に属し、一応支障なく実務できる技術を身につけ、その都度付け焼刃的な知識を導入してゆけば、まるでそのことに精通している専門家のようなしつたり顔で、無難にそつなくこなしてゆくことが出来ます。でも最近の六、七年、わたしの中では、こういった惰性或慣れで送り出す流れ作業的な仕事への反省や、自分自身のものを持たない思想上の追従者ではないかという不安感、それでもこの現状にヌクヌクと甘んじているわたしの驕りと弱さへの嫌悪感が確実に肥大していたのでした。そして、自分の納得のゆく仕事をするためにも早くなんとか手をうたなければというあせりはあるのに、この日までどこをどうしたらよいか見当もつかず、一見安定している日常生活の繰り返しの中に埋没し、ズルズルと目を重ねていたのです。

この不満やあせりは、主婦としていそいそと家事に精を出しても消えることはありませんでした。主婦の座は、わたしにとって仕事の代替地ではなかったのです。世間がそれなりに評価する良妻賢母の役割をいくら熱心に演じて、夫やこどもの人生にすがりつき、あなたなしでは生活できない寄生木ヤトリギのようなわたしの姿をそこに見るだけでした。わたしは、わたし自身の固有名詞で生きる世界を、わたし自身のために大事にしたい。

こんな思いをかかえているわたしの前に、あの新聞発表があったのです。しかも法学部ではありませんか。わたしにとって一番必要とし学ばなければならぬ分野です。受かるか受からないかは二の次、とにかく狙いを定めて勉強するのにこれほどのチャンスはありません。受験しようと決断するのに、躊躇は全くありませんでした。わたしは仕事の性質上、法学、政治学、そして経済学を学ぶ必要があるのです。社会報道番組を手がける場合も、キャスターとしてニュースを伝える時も、そこには常に政治、経済、法律がからんでいます。しかしわたしは、そのニュースの内容を完全に理解してコメントしていない。各専門分野の記者が取材しまとめたものを、わたしは機械的に読んでいるだけではないのか……。時には教育問題、婦人問題など、わたし自身が取材し報道することもあります。ですから多くの場合は、そのことに精通しているような顔をしてコメントしているにすぎないのです。わたしはわたし自身のために、この日大学受験を決意したのです。

志望理由書へのラブレター

大学受験を決意したものの、事は極秘裡に運びたいのです。これは全く個人的なことであるのですから、今までの生活の様相を変えることなくひっそりとやりたいのです。第一落ちたら、や

っぱり恥ずかしい。勉強したいという意欲は一人倍あっても、受かる自信なんて持てるわけがありません。とにかく受験勉強とは無縁の生活だったわけですから……。

※

立教大学法学部の社会人入学試験要項はこんなふうでした。

趣旨Ⅱ 本学部に入學を希望する勉學意欲旺盛な社会人を、通常とは別の入學試験によつて受け入れ、社会人にも大学の門戸を開くことを目的とする。

入學許可人員Ⅱ 法学部四百五十名中、二十五名を限度とする。

出願資格Ⅱ 昭和五十四年四月一日現在満二十二歳以上で大學入學資格を有する者。

出願手続Ⅱ 所定の出願書類の他に、大學指定の用紙に本人自筆の志望理由書と、家族、知人、勤務先などに書いてもらった推薦書三通を必要とする。

選考方法

第一次書類選考Ⅱ 出願書類を審査し、志望理由書および人物がこの学部での教育目的に合致しているかどうかが主な選考基準である。

第二次学力試験Ⅱ 書類選考合格者を対象として論文・英語の試験を行う。

(1) 論文 テーマは特定の科目や法学・政治学にかたよらないよう出題され、論文作成のための素材や枠がある程度与えられる。論文の評価は問題理解力、論理的構力、文章表現力、知的素養などについて行い、試験時間は百二十分。

(2) 英語 大学における学習に必要な基礎的英語能力の有無を審査する。英語の文章を読解できるかを問う。辞書一冊持ち込み可。試験時間は百二十分。

第三次口頭試問Ⅱ論文・英語の成績上位者を対象として、志望理由、社会人としての経験および判断力をみる。

前例のない試みだけに大学側には心配な面もあったようですが、予想をはるかに越す十倍以上の志願者があったということで、「制度新設の社会的意義が裏付けられた」とコメントし、「四十歳以上の人の応募が十六人もいた」と締めくくっていました。ああ、この中の一人がわたしなのです。

わたしは自分の手で賽を投げました。ありのままぶつかるしかありません。志望理由書には、まるで恋心を打ち明けるように、今わたしには学ぶ場所が必要だ。基礎からじっくりと法学、政治学を勉強したい。若い頃よりもその意欲は強く、その的はしぼられている。この心のたぎりを受けとめてほしいと思いのたけを綿々と書き綴りました。

それは君自身の問題

夫はわたしと結婚をするとき、自分は仕事を持った女と結婚するのだとはっきり認識している